

静岡文化情報

(財)静岡市文化振興財団

まちがど

VOL. 35

MACHI-KADO



美和探訪

人と自然が調和するまち

美和地区は、周辺の山々と安倍川の恵みによって古くから農業を生業の中心としてきた地域である。時が流れた現在でもその地理条件を活かした各種農業が盛んに行われ、特に茶栽培ではその名が県内外に広く知られている。

日本が高度経済成長期であった昭和40年代には安倍口団地の造成により人口が急増。同じ頃、地区と市街地を結ぶ狩野橋が木造から鉄筋コンクリート造のものへと架け替えられたことで、交通網が大きく発展する。これにより、美和地区は経済、文化、生活等あらゆる面で目覚ましい躍進を見せ、街道沿いは多くの商店、住宅で賑わった。

近年では成長のピークこそ過ぎたものの、市街地のベッドタウンという側面があるほか、ハイキングやウォーキングの名所などもあり、自然を身近に感じられる地域として知られている。



安倍口団地は静岡県営と静岡市営の住宅が共存する大規模団地。



地区と市街地を結ぶ交通の大動脈として、美和の発展を支えている狩野橋。



さまざまな商店が立ち並ぶ美和街道は、地区の中心として人々の暮らしを支えている。今も昔も多くの人が行き交う。



緑豊かな山々と、清流のせせらぎに囲まれた
人と自然が調和するまち“美和”。
この地の知られざる魅力を発見してみませんか？



◆ 内牧大茶会

内牧町内会が毎年11月3日の文化の日に開催している茶会。

内牧産のお茶を多くの方に知っていただくのが目的なので、茶会といっても作法にはさほどこだわらず、小さな子どもからお年寄りまで気軽に参加できる。その親しみやすさから来場者は年々増え、21回目を迎えた昨年は1,000人以上の方が会場を訪れたそうだ。

さまざまなイベントも併催されており、市内屈指の大茶会であると同時に、内牧地区の文化祭でもある。



◆ みや川倶楽部

「みや川倶楽部」は、ご主人である島田さんが焼き物や絵画、書道、染物などを趣味で楽しむために設立した工房。眺めのいい高台にある工房には、島田さんの趣味の多彩さを物語るように様々な作品が並ぶ。

ただし、そこはあくまで趣味のための工房。作品を商品として飾るこざいアトリエではなく、むしろ大人の秘密基地に近い雰囲気だ。

最近では工房内に自作した窯での焼き物に取り組んでいる、と島田さん。窯が試運転の最中ということもあってか、必ずしもイメージどおりの作品に焼き上がらないこともあるそうだが、「自分の思いと違う形に焼きあがるのも焼き物の魅力だよ」と語る。



◆ 立体画のロックアート

ロックアートとは、砂・砂利・石・岩を画用紙に貼り、その上に風景を描いた透明の亚克力板を重ねて立体感を出すという、工芸と絵画の中間のような作品。

制作者の木下さんは7年前からロックアートの創作に取り組んでおり、上野の森美術館の『日本の自然を描く展』では4年連続で入選を果たしている。工房では、入選作品をはじめとした鮮やかな作品の数々を楽しむことができるだけでなく、時には木下さん自身による作品解説もあるのだとか。

ちなみに、葵区門屋にある「手作り・趣味の店“明日葉”」にも作品を置いているそうなので、興味のある方はそちらも併せてご覧いただきたい。



◆ 本山製茶株式会社

大正5年「海野金次郎商店」として創業し、長きにわたり受け継いできた手法で本山茶を守り続けている老舗の製茶会社。

地元の農家と協力して土壌作りからこだわり、使用する肥料、農薬などまで徹底した研究を繰り返している。また、味と香りを仕上げる“火入れ”の技術にも重点を置いており、経験豊富な職人による炭火仕上げで、本山茶の上品な香りと味の深みを引き出している。

「お茶を飲んだときの“ほっ”とする幸せなひとときを感じていただきたい」というのが、従業員一同に共通する思い。全国のお客様に“ほっ”とするひとときを提供できるよう、日々励んでいる。



社長の海野 勲氏



◆ 西ヶ谷総合運動場

緑豊かな自然に囲まれた総合スポーツ施設。陸上競技場をはじめ、野球場、テニスコート、屋内プール等充実した運動設備を備えており、市民の身近なスポーツ施設として利用されている一方、各種競技大会の拠点としても重要な役割を担っている。

また、陸上競技場の外周はウォーキングコースとなっており、休日には老若男女問わず多くの方が汗を流している。

◆ 安倍城跡

安倍城は今から約600年前の南北朝時代、南朝方の武将として活躍した狩野貞長公の居城跡。貞長公はここを居城に北朝方の今川氏に対抗したといわれている。

城跡からは静岡市内が一望でき、市街地に近いこともあってハイキングコースとして市民に親しまれている。



城跡からの風景

安倍口へ 遠藤新田



おまわ

◆ ファミリーレストラン小沢

世間によくあるファミレスとはずいぶん雰囲気の違うファミリーレストラン小沢。ご主人によれば、もともとはうなぎ屋として店を構えていたのだそう。ところが、もっと気軽に家族で楽しめるようにとカレーライス、ラーメンなどの洋食や中華もメニューに加えていったところ、品数が100品近くまで増え、結果としてファミリーレストランとなったのだという。

ボリューム満点の「Cセット」やご主人オススメの「味噌ラーメン」など、人気メニューもよりどりみどり。家族の誰もが楽しめる、まさに「ファミリーレストラン」なのである。



人気のCセット！

◆ おしょくじ・けーき・おそうざい 柳

やなぎ

美和街道から少し離れた、小さな川沿いにあるケーキ屋さん。ショーケースに並んだ手作りケーキは、美味しいのはもちろんのこと、添加物の使用を抑えたヘルシーな仕上がりが。お客様に喜んでもらえるのが一番嬉しいというご主人の佐藤さん、「こういうのはできる？」と言われると、新メニューを作ってしまうこともあるという。

ちなみに、柳ではお弁当も作っているのだが、こちらは決まったメニューがない。予算、人数、季節に合わせて、毎回中身を変えているのだそう。

柳は遠方からもリピーターがやってくるひそかな人気店だが、そのわけは佐藤さんの細やかな気遣いにあるに違いない。



◆ 平和堂(焼ポン)

へいわどう やき

薬品店の一角で焼ポンの製造販売を行なっている平和堂。なぜ焼ポンを？とご主人に尋ねたところ、露店で買った焼ポンの味に家族全員がやみつきになってしまい、この味を一人でも多くの人に伝えたいと考えたから、とのお答え。その狙いどおり評判は口コミで広まり、お客様の中には「家族全員がやみつきになった」と5日連続で訪れる方もいたのだそう。

栗の風味は残しつつ、特殊圧力製法で香ばしく焼き上げた焼ポン。やわらかくほっこりとした歯応えにやみつきになる人は、これからも増えそうだ。



これが噂の「焼ポン」！

◆ 画廊喫茶れぎゅう夢

斜めに傾いているのかと思わせる個性的な建物が目を引く画廊喫茶れぎゅう夢は、その名のとおり、美しい絵画と美味しい食事の両方を楽しめるお店だ。

客席の多くはテーブルごとに仕切られており、ゆとりのある配置。周りに飾られた絵と置物がテーブルごとに違った雰囲気を醸し出しており、他のお客様を気にする事なくゆっくりとそれを楽しむことができる。中には、こたつに入っているのんびり食事と絵を楽しめる席も。「気楽にゆっくりしたい人は是非どうぞ」と語る店主の芹澤さんの心遣いが嬉しい、隠れ家的な名店だ。



◆ 海野農園(百姓のいちご)

うんの のうえん ひゃくしょう

安倍口小学校のすぐ隣に、「いちご直売所」ののぼりが翻る。そこに並んでいる「百姓のいちご」は海野農園でその日に採れたばかりのもので、さわやかな甘みがありまさに絶品。「低農薬・低肥料だから、洗わずにそのまま食べて大丈夫」と、このいちごを育てた「百姓」の海野さんは胸を張る。

15年前に直売を始めて以来口コミで人気が広がり、現在では北海道から沖縄まで全国にいちごを発送しているそう。「手間をかけて育てたいちごなので、一番おいしい時に味わってもらいたい」と語る海野さん。「百姓のいちご」の名前には、海野さんの百姓としての誇りが込められている。



ご主人自慢のスイーツがたくさん！

◆ ル・ヴェルト



美和街道から少し入ったところにある、緑色の外壁が印象的なパン屋さん。店名はフランス語で「緑色」という意味で、美和地区が緑豊かなこと、ご主人のラッキーカラーが緑色だったことから名付けられた。

定番のメロンパンやあんパンは、程よいやわらかさと食べやすさが人気。また、土日限定商品のライ麦パン、長時間発酵フランスパンは根強いファンも多く、これを求めて近隣のみならず遠方からも多くの方が訪れる。

「パンは季節によって品質が変わりやすいので、一年中安定した味を提供できるよう気を配っている」とご主人。そのきめ細かな心遣いはパン生地に表れており、いつの時代も変わらぬ美味しさで訪れる人を迎えてくれる。



◆ 菓子工房スイーツドッグ

かしこうぼう

オーナーパティシエの朝比奈さんが成年生まれということから名付けられた洋菓子店。店内の装飾は季節にあわせてアレンジされており、訪れる人々をほんわか幸せな気分にしてくれる。

「地元の人々の助けを借りながら、お菓子を提供していきたい」という朝比奈さん、スイーツには地元の農産物を多く使用。ホテルでシェフパティシエを務めた腕前で、旬の素材の持ち味を引き出している。

店内にはカフェスペースも用意されているので、四季折々のスイーツをお店の雰囲気とあわせて楽しんでみてはどうだろう。



◆パン工房あしくぼ

障害者福祉施設である静岡市足久保学園を運営する社会福祉法人明光会が、利用者自立支援の一環として平成20年から運営しているのがパン工房あしくぼ。

焼き立てパンの香りが漂う店内には、毎日25種類以上ものパンが並ぶ。中でも、静岡県知事賞を受賞した「あしくぼスペシャル」と「あしくぼ三楽」は午前中で完売してしまうほどの人気だ。

最近では、地域の保育園や児童クラブからの注文やイベントへの出店など、パンづくりを通じて地域との交流の輪も広がっています、と工房を運営する足久保学園の降矢園長。「今後も、地域の方々から愛される店づくりを目指していきたい」と意気込みを語ってくれた。



◆布あそび

布あそびは、布と手芸材料のお店。店内には手芸材料と、店主の向山さんの作品が所狭しと並んでいる。向山さんがお店に飾る作品は、1月に雛人形を飾ったりと、少し先のものが多い。これは、作品を見本にお客さんが作り始めても間に合うように、との心遣いだ。東京出身の向山さん、近所づきあいが薄くなりがちな住宅街の中でも地区の人たちと仲良くしたい、とパッチワークや吊るし雛の教室を開いているそう。その甲斐あってか、お店は地域の人たちがおしゃべりする交流の場にもなっている。



入口のこの看板が目印！

◆望月商店(清酒あしくぼ)

明治43年創業で、現在のご主人で4代目となる老舗酒店。お酒の他にも、たばこ、お米、日用食品や雑貨等、地元の人々の生活に密着した品揃えが評判を呼んでいる。

豊富な取扱商品の中でも、一番人気は「清酒あしくぼ」。お店の裏庭の手押し井戸から汲み上げた足久保の地下水で加水調整した望月商店のプライベートブランドで、もちろんここでしか手に入らない一品だ。特に年末年始にはよく出るそうで、地元の人々のお歳暮、お年賀の品として用いられることが多いという。足久保土産にぜひおすすめしたい。



足久保の地酒「清酒あしくぼ」

◆餃子よしみ

お店の前には「餃子」の文字が踊るのぼり旗。「餃子よしみ」は平成17年、美和街道沿いにオープンした精肉店だ。お店の看板商品は、のぼり旗にもあるとおり、朝霧高原のブランド豚を100%使用した餃子。

「とにかく美味しいものを食べていただきたい」というご主人のこだわりは肉のみにとどまらず、キャベツ、ニラ、ニンニク等の具材にもおよんでいる。大きめに切られた具材は厳選された国産品で、肉のジューシーさをより引き立てている。

店内には朝霧高原のブランド豚を中心とした精肉のほか、惣菜やおでんも顔を揃え、地元はもちろんのこと、市外からも評判を聞きつけた人々が訪れる。



◆美和焼

「美和焼」は、窯元の伊藤さんが「賤機焼き」で身につけた技を基に自家製の釉薬(ゆうやく)を用いて制作する焼き物。使い込むほど手になじみ、温もりのある雰囲気となるのが特徴だ。

美和焼の魅力について、伊藤さんが開講している焼き物教室の生徒に尋ねてみた。すると、「やさしい肌合いや、青や紫といった落ち着いた色が魅力的。これは産みの親の伊藤先生の温厚な人柄によるものだと思います」とのこと。その趣きもさることながら、伊藤さんの人柄も魅力の一つようだ。そんな伊藤さんの作る焼き物だからこそ、温もりのある雰囲気になるのだろう。



◆足久保ティーワークス

足久保の茶農家が組合を作り、共同で設立した製茶工場が足久保ティーワークス。全国でも数少ないハイテク設備を持ち、多いときにはなんと1日に20,000kgものお茶の生葉を加工している。

しかし、ハイテク設備に任せっぱなしにしないのがこの組合の心意気。すべて機械任せで生産することもできるのだが、敢えてそれをせず、茶葉の手触り確かめながら微妙な調整を加えているそう。

お茶の出来はその年の気候に大きく左右されるし、陰しい山の畑では苦勞も多い。それでも「美味しいお茶ができると報われる」と、組合長の中山さん。きっと、今年もこの工場で美味しいお茶が作られていくはずだ。



8月～3月の日曜日には、地元産の野菜が集まる「ふれあい市」も開かれる。

◆木魂庵

木魂庵は、材木会社を営む八木さんが「木と会話をしながら、木の目線に立って建てた」という建物だ。一見すると普通の家にも見えるこの建物だが、中に入ろうとしても縁側が続くばかりで玄関が見当たらない。八木さんに尋ねたところ、この建物に玄関はないとのこと。四方はすべてが縁側で、「ここが入口」という場所はないのだそう。

間取りも一風変わっており、必ずしも人が住みやすい造りにはなっていない。しかし、古民家の大黒柱の活用や木本来の形を活かした造作などは、「木魂庵」の名のとおりの木を感じさせる。また、建築にあたっては昔ながらの木造建築技法を駆使したそうで、「300年は保つ」と八木さん。

住宅として見ると不思議な木魂庵だが、よく考えれば「木と会話をしながら、木の目線に立って建てた」のだからそもそも住宅ではないのだ。木の形を大事にし、古民家の梁を再利用し、木造建築の技法を駆使する…。木魂庵は八木さんが木と共に作り上げた、いわば「住宅のようなアート作品」なのではなかろうか。



特集

静岡茶発祥の地

足久保は、聖一国師により静岡で初めて茶の種が播かれた静岡茶発祥の地であるとのこと。聖一国師は、足久保から突先山の峠を越えた先に位置する栢沢出身の僧侶。中国から茶の種子を持ち帰り故郷に帰る途中、中国の茶産地に地形の似ていた足久保に播いたのだという。聖一国師が歩いたとされる足久保から栢沢へ釜石峠を越える山道は「ティーロード」と名付けられ、現在ではハイキングコースとして親しまれている。

足久保は茶の生育に適した土地

であり、現在に至るまで茶の栽培が盛んに行われている。険しい山肌を茶畑に使い、環境にも配慮した低農薬、低肥料で栽培するため、生産量は決して多くない。しかしお茶に適した土に恵まれて、独特の香りを持つ良質のお茶が採れる。さらに、現在でも茶農家同士で集まって研究会を作ったり、共同工場を設立したりと、茶の品質を向上させるための活動が行われている。また、機械による製茶の普及によって失われつつある手揉みなどの技術の継承や、足久保茶の歴史の伝承など、茶文化を次世代に引き継ぐための活動も始まっている。

奥長島にある「静岡茶発祥の地」の石碑

ちと小話

●重箱墓場の話

江戸時代には、足久保茶は将軍に献上するお茶として取り立てられ、足久保一帯は茶産業で栄えたが、この時代にまつわる、少々物騒な言い伝えがある。

ある時、献上茶の権利が差し止められてしまい、生活が苦しくなった茶農家の人々は、怒って名主であった新五郎の家を焼き討ちにしてしまったという。女中と老婆がその場を逃れたが、逃げきれずに山中で殺されてしまった。老婆が殺された場所は「姥ヶ沢」、女中が胸を斬られた場所は「胸切沢」と名づけられ、現在でもその地名は残されている。

後年、新五郎を哀れに思った人が墓を作った。石を何段にも重ねたその墓は当時としては珍しい作りで、「重箱墓場」と呼ばれるようになったという。これを欲しがった医者が墓石を持ち帰ったが、この医者は程なくして亡くなってしまったそうだ。この重箱墓場は、今でも八十岡にある永福寺跡の墓地で見ることができる。



～狐石～



口長島にある巨石「狐石」。高級煎茶「青茶」の製造開始を記念した碑文が刻まれている。

美和地区の 学び舎

足久保では、小中学校でもお茶が教育に取り入れられている。

足久保小学校では、毎年お茶に親しむ行事が行われている。5月には全校生徒でお茶摘みを体験。この時に摘んだお茶を使って、6月には「足久保茶を楽しむ会」を開催。この会では6年生が作法に則って下級生にお茶を振る舞う。下級生たちも菓子皿や茶托、席札を作ってお茶会に協力。地域の方々も招いて、皆で地元のお茶に親しんでいる。

美和中学校では、新入生は入学するとすぐに「歓迎の茶会」で先輩のもてなしを受ける。その後1年かけてお茶の作法を学び、卒業までに3回のお茶会を開くが、これはただお茶を飲むだけの会ではない。1年生の終わりには「自立の茶会」で地域の方々をもてなし、2年生の「立志の茶会」ではお世話になった方々に将来への志を述べ、卒業前の「感謝の茶会」では保護者の方々にお礼の気持ちを伝える。この地区では、子どもたちはお茶会を通して人との触れ合いも学んでいるのである。



美和中学校の「立志の茶会」

足久保小学校の茶園

◆ヤマメ料理 牛ヶ峰荘

美和街道から少し入った先の、木々に囲まれた閑静な山あいにはたずむヤマメ料理店。38年前のオープン以来の常連客もいるという足久保の隠れた名店だ。

山小屋風の店内には外の川から引いた清流が流れており、注文するとご主人がそこからヤマメを水揚げしてくれる。新鮮なヤマメの刺身や塩焼きはまさに絶品で、オープン以来の常連客がいるというもうなづける味だ。

また、店を切り盛りするご主人とそのお母さんの気さくで温かい人柄も魅力のひとつ。お店のたたずまいや新鮮なヤマメ料理とあいまって、街のレストランでは決して味わうことのできない、独特の雰囲気を楽しめるはず。



まずはこちら。塩焼きは絶品です！

◆啼鳴庵 やまさき

畑に囲まれたのどかな景色の中に建つ「田舎の創作料理」のお店が啼鳴庵やまさき。草葺きの屋根と庭に流れる小川が、のどかな雰囲気をもたらし引き立てている。

お昼の定食には地元の畑で採れた野菜を使った料理が15品以上も並ぶが、その中でも一番の売りはお金を使って薪で炊いたご飯。磯海苔と甘めのお醤油をかけていただく醤油ご飯は、シンプルながらもご飯の美味しさを再認識させてくれる。

店名は「春眠暁を覚えず」の言葉で有名な孟浩然の詩「春暁」の一節から。春の景色を歌った詩の通り、美味しい料理とのどかな景色にゆっくりと癒されるお店だ。



◆SATO

長沼に本社を置く住宅建築会社木藝舎のショールーム。周りを緑豊かな木々が囲み、バーベキューやキャンプ場、子どもが遊ぶ砂場など、自然の中で楽しく過ごせる「里(SATO)」のような空間が広がる。

「ここで楽しく過ごしていただくことで、家づくりについての言葉では表現できない空間を見つけていただこうと考えて始めた」という社長の八木さん。のんびりとしたSATOの雰囲気に浸ることで、居心地の良い空間のイメージが浮かんでくるという。

また、不定期ではあるものの流しそうめんや、木のスプーンづくりなどSATOならではの各種イベントも開催されている。家を建てようと考えている人ももちろん、そうでない人も足を運んでみてはどうか。



◆相沢町内会の花壇

谷沢から相沢へ向かう道の途中に、小さいながらも手入れの行き届いた花壇がある。静岡市の花壇コンクール地域の部に5年連続で入賞、平成21年には最優秀賞に輝いた足久保相沢町内会の花壇がそれだ。

花壇には毎年テーマがあるそうで、平成21年にはチューリップで川の流れを表現。今年は駿河湾に浮かぶ富士山をイメージして制作中で、春・夏・秋でそれぞれ違った花を楽しむことができる予定だ。ポンプの水が冬の寒さで凍ってしまったり、動物に種や苗を掘られてしまったりと花壇づくりは大変だが、「皆さんが花壇を見て心を和ませてくれれば」という思いで花壇づくりを続けている。





柏市 静岡市立芹沢銑介美術館 所蔵

芹沢銑介

—花ヨリモ花 染メノ花—

の名作

2010年1月5日(火)～5月16日(日)

まさに《花ヨリモ花》。
150点が奏でる至福のハーモニー。

【開館時間】 9:00 ～ 16:30

【休館日】 毎週月曜日(1/11, 3/22, 5/3を除く)、1/12, 2/12, 3/23, 4/30, 5/6

【入館料】 一般410円、高大生250円、中学生以下無料(団体割引30名以上50円引き)

※静岡市内在住70歳以上の方、身体障害者手帳等の交付を受けている方とその介助者1名は無料

【交通】 バス……静岡駅南口22番バスのりばから「登呂道跡」行き乗車、約12分終点下車 / タクシー……静岡駅南口から登呂公園へ、約10分 / 東名高速……静岡インターより約10分 / 駐車場……登呂公園南側に無料駐車場があります

静岡市立芹沢銑介美術館

静岡市駿河区登呂5-10-5 TEL054-282-5522 www.seribi.jp

<写真> 芹沢銑介作 小川紙造村文重物 (部分 1943年制作)